

メタファーの普遍性と文化的変異についての一考察 —英語と日本語におけるイヌに関するメタファー表現をめぐって—

On universality and cultural variation in metaphor: Dog-related metaphorical expressions in English and Japanese

松井 真人

Mahito MATSUI

Abstract: This paper deals with the problem of universality and cultural variation in metaphor. I will discuss this problem focusing on dog-related metaphorical expressions found in English and Japanese. The dog metaphor plays an important role in making sense of people, objects and events in both English-speaking and Japanese cultures. It is true English shares several dog-related metaphorical meanings with Japanese, but there are also some semantic differences in the dog-related metaphorical expressions in the two languages. It will be demonstrated that these similarities and differences are closely related to the ways people have interacted with dogs in Western and Japanese cultures.

Keywords : metaphor, dogs, universality, cultural variation

1. はじめに

Lakoff and Johnson(1980) に始まる新しい認知的な視点からのメタファー研究は、近年著しく発展し、メタファーは単に言語のレベルだけではなく、概念（包括的な知識構造）体系のレベルに関わる問題であり、人間の概念体系の大部分がメタファーによって構造化されているということが明らかになってきた。レイコフは、メタファーをソース領域(source domain) からターゲット領域(target domain) への写像であると考えているが、これは別の言葉で言えば、ある経験領域を、より身近で具体的な経験領域に見立てて理解するということである(Lakoff(1993:206-207))⁽¹⁾。すなわち、メタファーは単なる言語の装飾ではなく、人間の認知の重要な方略の一つなのである。個々のメタファー表現は、概念レベルにおけるメタファー的理解の反映である。例えば、我々は概念のレベルにおいて「議論」を「建築物」に見立てて理解しているからこそ、その結果として、議論について語るための次のような日常的な言語表現が多数存在しているのである。

The argument is *shaky*. 「その議論（主張）はぐらついている」

We need some more facts or the argument will *fall apart*. 「もっと事実が必要だ、さもなければその議論（主張）はくずれてしまう」

We need to *construct a strong* argument for that. 「それには強靱な議論を組み立てる必要がある」

I haven't figured out yet what the *form* of the argument will be. 「議論がどんな形をとるか、まだわからない」

We need to *buttress* the theory with *solid* arguments. 「堅固な議論でその理論を補

強する必要がある」

The arguments *collapsed*. 「その議論は崩壊した」

Lakoff and Johnson (1980) (渡部他訳(1986:70-71))

さて、メタファー研究の重要な視点の一つに、メタファーの普遍性と相対性の問題がある。すなわち、メタファーには国境があるか否かという問題である。上に挙げたメタファー表現の中にも、その日本語訳が、日本語として普通に感じられる文と、かなり翻訳調に感じられる文がある。したがって、一見異文化間で完全に一致していると思われるメタファーも、普遍的である可能性が高い側面と、文化によって異なる側面の両方を内包していることがわかる。ここで興味深い問題は、あるメタファーの特定の側面が普遍的である、あるいは文化によって異なるのはなぜかということである。本稿では、このようなメタファーの普遍性と文化的変異の問題を、日英語の比較を通して論じていく。

さて、ターゲット領域を理解するために用いられるソース領域は、上で述べたように、我々人間にとって身近な対象物に関する概念である。Kövecses(2002) は、よく使われるソース領域として、the human body, health and illness, animals, plants, buildings and construction, machines and tools, games and sport, money and economic transactions (business), cooking and food, heat and cold, light and darkness, forces, movement and direction を挙げている。これらのソース領域は、系統がまったく異なる言語である日英語双方において用いられていることから、世界中の文化で広く用いられている可能性が高いと考えてよいだろう。本稿では、animals の中でも世界の大部分の地域において、人間との関わりが最も深いイヌのメタファーを取り上げる。イヌの概念は、英語圏文化と日本文化の双方において、ソース領域として、人間や物事に対する意味づけに関与している。しかし、ソース領域となる概念は、人間と対象物との関わりを通して構造化されていくので、同一の対象物に関する概念でも、異文化間でその対象物との関わり方が類似していれば、その概念内容は類似したものになるし、関わり方が異なれば、概念内容は異なってくる。すなわち概念形成にはそれぞれの地域や民族の文化が反映するのである。そして、同一対象物に関する概念内容が異文化間で異なれば、それらの概念がソース領域として関与するメタファー自体も相対的なものとなり、さらに、関与する概念の内容が異なるそれらのメタファーから派生されるメタファー表現の意味も異なってくるわけである。そこで本稿では、まず日英語のイヌに関するメタファー表現の意味の共通点と相違点を明らかにし、さらに、そのような共通点と相違点が生ずる理由を、西洋文化と日本文化における人間とイヌの関わり方という観点から検討する。

2. イヌのメタファー

2.1 英語における「イヌ」

本節では、英語の「イヌ」の隠喩的意味を確認していく。資料としては、主として *Oxford English Dictionary* (2nd ed.)(*OED*)、*Collins COBUILD English Guides 7: Metaphor* (*COBUILD*)、『小学館ランダムハウス英和大辞典第二版』、『新英和大辞典第五版』を用いる。

まず、dog について。メタファー表現としての dog には、人間や物事の性格や性質を喩えるものと、物の形態を喩えるもの（例えば、the Dog が星座の大犬座や小犬座を意味する場合）があるが、本稿では前者に焦点を当てて考えていく。まずは dog を名詞として用いて、人間に適用する場合は、「嫌なやつ、裏切り者、信用のならないやつ」といった意味にな

る。また、形容詞とともに用いられる場合には「男、やつ」という意味になることもある。*OED*によると、この場合、よく用いられる形容詞は *cunning*, *jolly*, *lucky*, *sad*, *silly* などであり、‘You, jolly dog!’ ‘愉快的奴!」、‘You, sad dog!’ ‘困った奴!」のように用いる。*OED* にはこの用法の説明として、‘playfully (usually in humorous reproof, congratulation, or commiseration)’ という記述があることから、非難したり、祝福したりしていても、そこにはおどけたような、ふざけたような気持ち、すなわち戯言的、愛称的なコノテーションが含まれていることがわかる。この用法については Empson (1989) や大石 (1987) が詳しく論じている。エンプソンはこの用法を「同僚的用法」(hearty use) と呼び、今では立派 (respectable) な人に対しても用いられる用法であるという。大石はこの dog の用法について「話し手から相手への愛顧、反語、同情などの情緒的ニュアンスが伴っており、その際、話し手と相手の関係の仕方には、お互いがいわば自然児、悪同志と認め合った上での、やや男っぽくやくざっぽいく裸と裸のつき合い>的な相互関係の感触があると思われる」(大石 1987:42-43) と述べている。

さらに、dog という表現が物に対して用いられると「くだらないもの、ひどく粗末なもの」という意味になり、‘He said the old car was an absolute dog to drive’ (*COBUILD*) というように用いる。この用法では、さらに細かく、「(演劇や音楽などの) 失敗作」、「扱いにくい馬」、「商品価値のない物」、「もうからない商売」、「デザインの悪い服」といった意味になることもある。

さて、dog はある種の名詞とともに用いられて複合語を形成することがあり、その場合には「にせの、まがいもの」という意味になる。例えば dog-Latin は「変則的なラテン語」を意味し、同様の表現として dog-English, dog-Greek, dog-logic などがある。

上記の用法と似ているが、dog は植物名とともに使われることがある。*OED* のこの用法の説明には ‘frequently denoting an inferior or worthless sort, or one unfit for human food’ という記述があり、「劣った、有益性が低い」といったニュアンスが加わる。例えば、strawberry や blueberry が食用になるのに対して dogberry は食用に適しない果樹・木類であり、dog violet は香りがしない野生スミレである。

次に、dog を動詞として用いた場合には、「あとをつける、尾行する」という意味になるが、*OED* には ‘esp. with hostile intent’ という記述がある。また、災難や不幸などが「つきまどう」という意味にもなり、例えば ‘Controversy has dogged his career’ (*COBUILD*) という用い方をする。

dog から派生した形容詞形には、dogged, doggish, doggy, doggerel などがあるが、dogged は「容易に屈しない、頑固な」、doggish は「無愛想な、がみがみ言う、気取った」、doggy は「犬好きの、見えを張る、ひどい」、doggerel は主に詩について用いて「(韻律不調で) こっけいな、下手な」という意味になる。さらに、doglike という形容詞もあるが、これは「主人思いの、忠実な」という意味である。例えば、doglike devotion という表現は「いぢずな献身」という意味になる。

dog は副詞的にも使うことができる。その場合は、dog-tired のように形容詞と結びついて強調（「全く、完全に」）を表す。*OED* が挙げているその他の例は dog asleep, dog-drunk, dog-hungry, dog-lame, dog-lean, dog-mad, dog-poor, dog-sick, dog-thick, dog-cheap, dog-weary であり、*OED* によれば、これらの表現の dog は元々 as...as a dog 「イヌのように～」の意味である。したがって、dog とともに用いられている形容詞は、イヌに対する典型的なイメージが反映していると考えられるが、そのほとんどがネガティブな意味合いを持つ形容詞である。なお、dog-thick の thick は intimate の意味であり、この表

現にはイヌが群れを作って行動したり、じゃれ合ったりするイメージが投影されているのであろう。

つぎに、dog が成句の中で使われる場合を見ていく。これは、数多くのものであり、『小学館ランダムハウス英和大辞典第二版』には36種類の成句が上げられている。この中で、代表的なものを選び出すために、中辞典や学習辞典（『ジーニアス英和辞典第三版』、『アクティブジーニアス英和辞典』）を見てみると、次のようなものが記載されている。a dog in the manger 「いじわるな人」、as sick as a dog 「ひどく気分が悪い」、die like a dog [die a dog's death] 「みじめな死を遂げる」、dog eat dog 「同族の傷つけあい」、dressed [done] up like a dog's dinner 「いやに派手に着飾る」、go to the dogs 「落ちぶれる、（体の調子が）悪くなる」、help a lame dog over a stile 「人の難儀を救う」、keep a dog and bark oneself 「人に仕事をさせようとして自分でする」、lead a dog's life 「苦勞の多い生活を送る」、Let the dog see the rabbit! 「さあ、私にも参加させて」、like a dog with two tails 「大喜びで」、not have a dog's chance 「わずかの見込みもない」、put on (the) dog 「上品ぶる」、the dog it was that died 「罨に落ちたのは仕掛けた本人」、throw [give] something (or someone) to the dogs 「<物>を投げ棄てる、<人>を犠牲にする」、treat someone like a dog 「<人>を粗末に扱う」、try it on the dog 「犬に毒味させる、被害の小さいもので実験してみる」、fight like cat and dog 「とことん闘う」、work like a dog 「なりふりかまわず働く」。

以上の、メタファー表現としてのdogの考察から言えることは、それらの大部分には「みじめなもの、劣ったもの、役に立たないもの」という意味があるということである。しかし、dog が人間に適用されて「人、やつ」の意味を持つ場合には、OED の記述や大石の引用から、戯言的、愛称的なコノテーションが含まれていることがわかる。このような表現や、doglike 「主人思いの、忠実な」には、人間のイヌに対する「親愛の情」であるとか「仲間意識」が反映していると考えられる。以上をまとめると、dog の隠喩的意味からは「劣ってはいるが、愛すべき仲間」というイメージを読み取ることができる。大石(1987)は、英語のdogが内包している、このような相反する二つのイメージについて、次のように述べている。

ここには、犬に対する軽蔑の念、さげすみの味わいと、親愛と同情の気持ち、共感の味わいとが、紙一重になって重なり合っていることに気付かれよう。たしかに、犬は、くだらないもの、卑しいもの、価値のないもの、恥ずかしいもの等々を表しているのだが、他方、それは、まさに、このようなものであるがゆえに、なんとなく、いとおしく、親しみやすく、庇護してやらねばならない対象でもあるかのように感じられているのだ。

大石(1987:40)

その他に、動詞のdog や dogged には「執拗」というイメージが見られるし、doggish、dressed up like a dog's dinner、put on a dog などからは「気取る」というようなイメージも読み取れる。

イヌに関するその他の英語表現を見てみると、bitch 「雌イヌ」の隠喩的意味もネガティブなものが多い。名詞として女性に適用すれば「いやな女、みだらな女」の意味になる。'Son of a bitch!' は「畜生、この野郎」の意味である。また「不平、不満」の意味になることもあるし、物事に適用すれば「難しいもの、不愉快なもの、不幸なこと、ひどい状態」となる。動詞として用いると「台無しにする、不平を言う、だます、意地悪をする」という

意味になる。

hound「獵犬」をメタファー表現として用いると「卑劣漢」という意味になり、a jazz houndのように用いれば、獵犬が獲物を追跡するイメージから、「～に熱中している人」という意味にもなる。また、「ウサギ狩りごっこの鬼」、「新入生」という意味にもなる。動詞で用いると、「獵犬で狩る、<獵犬などを>(獲物など)にけしかける、追い詰める、追い出す」という獵犬の機能に基づいた意味の他に、「絶えず付きまとう、悩ます」「そそのかす、扇動する」の意味がある。ここには獵犬が獲物を追跡する際の「執拗さ」というイメージが現れているように思われる。

以上をまとめれば、英語のイヌのメタファー表現全般の意味から読み取れるイメージは、「みじめで、劣っていて、役立たずで、時には執拗な態度を取ったり、気取ったりもするが、憎みきれない愛すべき仲間」というものであると思われる。上の大石の引用でも述べられているように、英語の「イヌ」に関するメタファー表現の意味には軽蔑と愛情の両方の意味合いが込められている。

2.2 日本語における「イヌ」

本節では、日本語のイヌのメタファー表現の意味を検討する。主に参考とする資料は、『広辞苑第五版』、『日本国語大辞典第二版』、『新明解国語辞典第五版』である。

まず、「警察の犬」、「権力の犬」といった表現からわかるように、「イヌ」には「～に忠実なもの」という意味があるが、この場合は、自分の立身出世や地位の安定、自身の利益のために権力者に付き従うというネガティブなニュアンスがある。また、これらの表現にはこっそりと人の秘密を嗅ぎつけて、権力者に告げ知らせるというニュアンスもある。そこから、「イヌ」は「探偵」や「スパイ」の意味にもなる。

また、接頭語として「イヌ」を用いると、「役に立たない、無駄な、恥知らずの」という意味になる。例えば、「犬侍」は武士道をわきまえないような武士をののしってという語であり、「犬死」は無駄死のことである。また、「犬医者」は戴医者のことである。このような意味は、植物名とともに用いられる場合にも見られ、この用法については山田(1994, 1996)に考察がある。それによると、例えば、サクラと比べてイヌザクラは、花卉が雄しべよりもずっと短い。イヌホオズキはホオズキに似ているが、その液果は何にも利用できない。葉の香りがよいサンショウに対してイヌザンショウは葉に特有の臭いがある。ツゲの材は緻密で櫛や印判の材に用いることができるが、イヌツゲの材はツゲより不良であるために、ツゲの代用として用いられる。カヤの種子が食用や薬用になるのに対して、イヌガヤの種子は食用とはならず、その臭気する油は、機械油などに利用されるのみである。ウドは食用になるのに対してイヌウドは食用にならない。このような植物名称の分析から山田は次のように述べる。

「イヌ」という接頭辞は植物の形態的特徴を表現する語彙というよりも、有用性に基づく価値のレベルを表すのである。「イヌ」を名称の語彙素としてもつことによって、対照となる植物に対しより低価値の植物であることを表明することになっている。

(山田1994:249)

この「イヌ」の用法は、まさに英語の dogberry や dog violet における dog と同じ用法であると言える。

さらに、「イヌ」は「よく似てはいるが実は違うもの」を意味することがある。この場合

は「本物に対してへりくだる」というニュアンスが含まれている。例えば、山崎宗鑑の「新撰犬筑波集」は連歌である「新撰菟玖波集」に対する卑称である。このような、「へりくだり」という意味合いを含む「イヌ」の用法は江戸時代の仮名草子のタイトルである「犬枕」や「犬つれづれ」にも見られる。

また、人をののしって「犬畜生にも劣るやつだ」ということがあるが、「犬畜生」という表現の中の「犬」には「恥や恩を知らない人間」という意味がある。ここで興味深いのは犬と畜生（すなわち動物）が並べて用いられているということである。これは、日本文化では、イヌが人間にとって最も身近な動物であり、動物の代表と考えられていることの証拠と考えてよいだろう。

「犬の遠吠え」という表現の中の「犬」は、「陰で虚勢を張ることしかできない臆病者」を意味する。「犬の逃げ吠え」も同じような意味を持った表現である。

以上の日本語のイヌのメタファー表現全般の意味からは、「役に立たず、劣っていて、それでいて自分の利益のために権力者にはすりよる臆病者」というイメージを読み取ることができる。前節で見たように、英語の dog、bitch、hound にも日本語の「イヌ」と同じような「劣っていて、役に立たないもの」というネガティブな隠喩の意味がある。日英語それぞれが持つ独特なイヌの隠喩の意味としては、英語の「気取り」、「執拗」、日本語の「臆病」などがあるが、最も大きな違いは、英語の dog の意味には、日英語共通のイヌのイメージである劣等性や無益性にもかかわらず、「愛すべき仲間」とでも呼べるような意味合いも含まれているということである。それに対して、日本語の「イヌ」からはひたすらネガティブなイメージしか見えてこない。

さて、序論でも述べたが、メタファーとはある概念に基づいて他の概念を理解することであり、そのようなメタファー的理解からメタファー表現が派生してくる。イヌに関するメタファー表現は、ある概念がイヌの概念に基づいて理解されていることの反映である。したがって、上で見たような日英語のイヌに関するメタファー表現の意味の共通点と相違点には、英語圏文化と日本文化におけるイヌの概念の共通点と相違点が反映している。そして、ある対象に関する概念は、人間とその対象との相互作用を通して形成される。そこで次節では、日英語のイヌに関するメタファー表現の意味に、なぜ共通点と相違点が存在しているのかを説明するため、西洋文化と日本文化におけるイヌと人間の関わり方を見ていくことにする。

3. 西洋と日本における人間とイヌとの関わり

言語と文化の関係を論じる際に、注意しなければならないことは言語の保守性ということである。つまり、言語はその他の文化の変化に敏感に反応して変化していくのではないということである。例えば我々はいまだに靴を入れる場所のことを「下駄箱」と呼んでいる。本稿では、主に現代の英語と日本語におけるイヌのメタファー表現の意味を考察してきたわけだが、それらの表現の意味にも、過去の時代の人々が持っていた、現代とは異なるイヌの概念が反映している可能性がある。したがって、現代のイヌのメタファー表現の意味を説明する際には、現代におけるイヌとの関わり方ばかりでなく、伝統的なイヌとの関わり方も考慮しなければならない。

さて、イヌは最も早く人間によって家畜化された動物である。谷口(2000)によれば、人間とイヌとの付き合いが始まった時期は非常に古く、人間が家畜化した時代はヒツジが約1万2千年前、ヤギが約1万年前、ウシは約9千年前、ウマとニワトリが約5千年前、ネコが約4千年前であるのに対して、イヌは更新世（約2百万年前から約1万2千年前）の末期であるとのことである。最初にイヌが家畜化されたのは、インドか西アジアであると遺伝学的

研究によって推定されているが、北部ヨーロッパでも、家畜化された痕跡を残す中石器時代（約1万1千年前から約8千5百年前）のイヌの骨が発掘されている。また、日本でもすでに縄文時代にはイヌが家畜化されていた証拠がある。人間とイヌとの最初の出会いのプロセスについては推測の域を出ないが、おおよそ次のようなものであっただろうと考えられている。

おそらくこの時代〔旧石器時代の終わり頃〕の犬は、われわれが総説で述べたように、当時定住的になっていた人間の住居を訪れ、人間が食った食物の残りを漁ったり、あるいは野営の火に誘惑されてそれで暖をとり、塩気のある灰を食っていた野生犬であったであろう。そして、人間は、最初はこの犬を殺してその肉を食っていたであろうが、後にはこの犬が人間の住居の近くにある穢い食物の残りを食いあさって掃除してくれ、夜には人間や野獣の来襲をその鳴き声によって知らせてくれるという人間にとっての利益があることを知ってから、しだいにこの動物の接近を寛容するようになったのであろう。

加茂(1973:73)

つまり、人間がイヌを飼育するようになったのは、番犬、そして人間の残飯や排泄物を処理してくれるスカベンジャー（清掃動物）として役に立ったからであると推測される。このことは西洋にも当てはまり、Leach(1966:51)には、イギリスの田舎では、イヌやブタには餌として主人の残飯が与えられていたという記述がある。日本におけるイヌのスカベンジャーとしての役割に関しては、谷口(2000)に詳しい。谷口は、一般民衆が使うことができるようなトイレが未整備であった平安時代において、イヌが町の清掃係として活躍していた様子を次のように述べている。

絵巻の『餓鬼草子』には、庶民がこわれた築垣の前で、女も男も、子供も老人も、それぞれに用を足しているさまが描かれており、あたりには糞尿や紙、あるいは糞ペラなどが散乱している。

律令のさだめた官僚機構はかなりシステムチックなものだったが、そこには現代の衛生局やし尿処理課のような部署はなかった。だから、この共同トイレの処理は、だれか心ある人がやってくれないかぎり、そのままにされる。こういうことになると、都会人というのは今も昔も自分勝手であり、だれもそんなことはしない。そこで登場するのが犬、それにカラスや虫であった。〔中略〕とくに、平安時代の犬は、よく人糞を食べていたようである。

谷口(2000:49-50)

谷口によれば、この時代のイヌは人間の排泄物ばかりでなく、人の死体や捨て子、捨て病人なども食えることがあったという。この点は西洋も同じで、『動物シンボル辞典』は、ギリシア神話では「魔術を司る女神ヘカターが、犬の頭を持ち、夜、犬の群を従えて徘徊し、その犬どもは墓地で空腹を満たす」(p. 24)と述べ、ギリシア、インド、ペルシアなどの神話の中でイヌが残忍な性格を持つ冥界の守り手という役割を与えられているのは、死人の肉を食べるところから来ていると説明している。

残飯や排泄物、それに死体までもを食い漁るというイヌの性質は、洋の東西を問わず、人間にとって清掃係として役立つ一方で、イヌが穢れたもの、忌まわしいもの、劣ったものであるというイメージを作り出した大きな原因であると思われる。塚本(1997)は、江戸時代における日本人とイヌとの関係を論じる中で次のように述べている。

とくに都市的な場では、食物残滓によって繁殖し清掃役ともなる反面、彼らがヒトの埋葬遺体をも食し、また食い残しや排泄物をまきちらし、土を掘り起こすなどの行動が目についたのも古くからのことであった。そこからは、イヌには穢れの印象が強く付与された。

塚本(1997:38)

西洋では、その文化に大きな影響を与えているキリスト教が、イヌが穢れており、劣ったものであるというイメージを定着させることに一役買っている⁽²⁾。例えば、旧約聖書の中のダビデとペリシテ人ゴリアテの有名な決闘の場面では、ゴリアテがダビデに向かって「おれは犬なのか。杖を持って向かって来るが。」(サムエル記第一17章43節)と述べる。詩篇では、ダビデが自らの敵をイヌと表現し、「犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。」(詩篇22篇16節)、「私のたましいを、剣から救い出してください。私のいのちを犬の手から。」(詩篇22篇20節)と神に祈る。また、旧約聖書では、イヌは自分を卑下する謙遜表現として用いられることも多い。例えば、サウル王に追われたダビデは、「あなたはだれを追いかけておられるのですか。それは死んだ犬のあとを追ひ、一匹の蚤を追っておられるのにすぎません。」(サムエル記第一24章14節)と述べる。また、イエスも様々な場面でイヌをメタファー表現として用いているが、彼は旧約聖書の記者達に劣らずイヌに対しては手厳しい。山上の説教では、「聖なるものを犬に与えてはいけません。」(マタイの福音書7章6節)、また、カナンの女に対しては「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです」(マタイの福音書15章26節)と述べる。パウロもピリピの信徒たちに対して「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。」(ピリピ人への手紙3章2節)と警告する。この他にも聖書がイヌに言及している部分は数多くあるが、ほとんどがイヌをネガティブなイメージで捉えている。

以上のような理由に加えて、歴史上たびたび起こった狂犬病の発生が、日本と西洋の双方において、イヌに対するネガティブなイメージを強化する。ドロール(1998:424-425)は「1271年にフランスで、あるいは1427年にとくにドイツでこの病気が猛威をふるった時には、野良犬への恐れはパニックに変わり、野良犬はすべてたちどころに殺される」と述べている。これは日本でも同じことで、谷口(2000)によれば、1950年の狂犬病予防法の公布に基づいて、予防注射の義務づけをはじめとする様々な措置が採られたことにより、狂犬病は1957年を最後に発生がなくなったが、それまではたびたび流行し、その際には多くのイヌが撲殺されている。

前節と前々節において、英語と日本語のイヌのメタファー表現には「劣ったもの、役に立たないもの」という意味が含まれていることを見た。これは、上で述べたイヌたちのスカヴェンジャーとしての役割や人の遺体を食べるという行為、また、しばしば発生した狂犬病の流行などを通して形成された、「イヌは穢れて劣ったものである」という日本文化と西洋文化の共通したイメージを反映したものであると考えられる。

次に、英語と日本語のイヌのメタファー表現の意味の相違点が存在する理由を考えていく。まず、英語の「執拗」、「気取り」、日本語の「臆病」という意味合いについて。見知らぬ人やイヌを見かけると、長時間飽きもせず吠え続けているイヌを見かけることがあるが、そのようなイヌのしつこい性格に関する知識から、英語では「執拗」という隠喩の意味が生まれたのではないだろうか。また、狩猟犬が獲物をどこまでも追跡するイメージも「執拗」という意味の源泉である可能性がある。次に、日本語の「臆病」という意味についてであるが、イヌは自分より強いイヌの前に出ると、吠えられずにうずくまったり、尾を下げて

逃げてしまうということがよくあるが、このようなイヌの臆病さに関する知識がメタファー表現の意味に反映しているのであろう(沼田1990:32-36)。さて、以上のような「執拗」と「臆病」という性質は、世界中のイヌが持っている性質であり、おそらく西洋と日本の両文化のイヌの概念に含まれている知識であるにもかかわらず、これらの知識のうち、「執拗」は英語だけに、「臆病」は日本語だけにというように、それぞれが一方の言語の隠喩的意味に反映している。この事実に関しては、なにか明確な理由があるとは思われないので、言語の恣意性に属する現象であると考えざるをえないと思われる⁽³⁾。つぎに、英語の「気取り」という意味合いは、おそらくグレーハウンド犬のような西洋の狩猟犬の優美な体型や、その堂々とした歩き方に関する知識から派生した隠喩的意味であろう。『欽定訳聖書』の箴言30章31節には、足取りの堂々としているものとして、グレーハウンドが挙げられている。

さて、日英語のイヌのメタファー表現の意味の最も興味深い相違点は、英語のイヌのメタファー表現には、数多くのネガティブな意味合いとともに、「愛すべき仲間」というポジティブな意味合いが見られるのに、日本語のイヌのメタファー表現にはそれが含まれていないということである。この点における日英語の違いは、日本文化と西洋文化におけるイヌと人間の関係の次のような違いから生じているように思われる。

塚本(1997:33)は、幕末の日本のイヌの状況について「都市には、野良犬ないし放し飼いが多く、外国人にとって、攘夷をかかげたテロリストないし武装集団メンバーとならんで、恐怖の対象となった」と述べている。すなわち日本では、鷹狩用の鷹犬などとして特権階級に飼われていた一部のイヌを除けば、伝統的にイヌはペットとしての飼育動物ではなく、大半が野良犬であったのである。谷口(2000:185)は、「古代・中世の絵巻には、犬も多く登場するが、それらの犬につながれたものはいない」と述べており、中には首輪をつけたものがいくつかみられるが、それらは猟犬であり、猟に行くとき以外は放し飼いの状態であったとのことである。ただし、野良犬とは言っても、正確にはそれは半野良犬状態とでも言えるものであり、特定の人や家に属するのではなく、「村の犬、町の犬」として生きていたということである。柳田(1968:112)は「私などの生まれた村では、村の狗といふのが四、五匹は常に居たが、狗を飼つて居る家は一軒も無かつた。彼等の食物は不定であり、寢床も自分の癖だけできめて居た」と述べている。塚本(1997:36)は、江戸時代における「特定の飼い主に飼われてはいないが縄張り内のヒトのくらしに依存して生きるイヌ」の状況を「ヒトの小地域集団内でヒト—イヌコミュニティが成立し、ヒトはイヌに食料残渣を与え、犬はこれに依存して生きる反面、見慣れないヒト、イヌに敵意を示すから、ヒト集団内の番犬ともなる」と説明している。

このような、人間に束縛されない日本のイヌを、山田(1994)は文化人類学的に次のように分析する。ごく最近まで固定した飼い主を持たなかったイヌは山と里を自由に行き来できたのだが、古来日本では深山は他界であり、聖地であった。日本の伝統文化においては異なる世界との交流は祭りという場でおこなわれて、初めてプラスの価値を持つのであって、そことの自由な交流はマイナスの価値を持つ。イヌは里と山、すなわち人間の世界と他界の両方に属する両義的な性格を持つためにマイナスのイメージが付与されているのである⁽⁴⁾。

それに対して、西洋の状況はどうであろうか。動物行動学者ローレンツは、世界中のイヌの飼い方には次のようなやり方が見られると述べる。

もっとも原始的なやり方は、たくさんのイヌが人の住居のまわりに群がっているが、人間とのつながりはきわめてルーズなものである。ヨーロッパのすべての村落ではイヌの飼い方のもう一つのやり方がみられる。そこには数匹のイヌが特定の家に属しているが

特定の主人には属さないというものである。

ローレンツ (1966:18)

このように、西洋ではイヌは家という単位で飼われており、鈴木(1973:121)によればイギリスでは気候風土の関係から、人とイヌが一つ屋根の下に住んでいたのに対し、日本では上で述べたように半野良犬として村や町という単位で飼われていた。このような状況から、西洋ではイヌは人間との関係が日本よりはるかに親密なものになり、'A dog is man's best friend' という諺に典型的に表れているようなイヌに対する仲間意識が芽生え、「親しい仲間」というイメージが西洋文化におけるイヌの概念の一部として定着するようになったと考えられる。それに対して日本では、イヌは人間にとって身近な存在であっても、イヌと人間の関係は、西洋と比較すればはるかにルーズなものであったので、西洋におけるような明確な仲間意識が生まれなかったとしても不思議ではない。このような、西洋におけるイヌとの親密な関係は、西洋の基層的文化である牧畜文化の中で形成されたと考えることができる。西洋では、牧羊犬は長い間人間の仕事のよき相棒であり、イヌの飼育管理は非常によく行われていた。一方、日本は農耕文化を基層文化としているが、農耕の文化ではイヌの用途はほとんどなく、せいぜい番犬か、一部の特権階級の狩猟のパートナーであり、大半のイヌは上で述べたように野良犬であった(加茂1973:112)⁽⁵⁾。

また、西洋におけるイヌに対する仲間意識は貴族階級の狩猟の伝統によっても強化されたと考えられる。池上(1997)によれば、中世においては、森の中に住む熊や狼や猪は人間や家畜の敵であり、悪魔に類する存在であったのに対して、狩猟の相棒となるイヌはそのような野生世界を征服する人間の仲間であるという意識があったという。

このようなイヌに対する西洋と日本の意識の違いは、躰や訓練という面にも現れる。谷口は次のように述べる。

幕末から明治にかけて欧米人がつけてきた犬たちにも、曳き綱をつけていない例が多かったようだが、それは命令の範囲であり、よべばすぐに飼い主のもとにくる訓練がされていたものようである。日本の町の犬・村の犬たちは、それが飼い犬であっても、訓練はもちろん、基本的な躰をされることなく育った犬たちであった。

谷口(2000:186)

もちろん現在の日本では、イヌと人間の関係も欧米化し、イヌの飼育に手間をかける人が増加した結果、町で野良犬を見かけることもほとんどなくなったのであるが、塚本(1998)によればこのような変化が見られるようになったのはつい最近のことであり、イヌの放し飼いが規制されるようになった1970年代からである⁽⁶⁾。

また、西洋と日本のイヌに対する仲間意識という点での違いは、食文化にも表れている。谷口(2000)によれば、日本では、仏教の影響で伝統的に肉食忌避の傾向が強かったことは確かだが、それでも肉食の文化が全くなかったわけではない。犬食も例外ではなく、すでに弥生時代の遺跡から出土した犬の骨に食べられた痕跡がある。またイヌが食べられていたことを示す中世や江戸時代の文献も数多くある。例えば、戦国時代末期から江戸時代初期に宣教師として日本に滞在したルイス・フロイスは「ヨーロッパ人は牝鶏や鶉、パイ、ブラモンジュなどを好む。日本人は野犬や鶴、大猿、猫、生の海藻などをよろこぶ」(フロイス1991:98)と書き残している。それに対して、イギリスでは、イヌを食べるということは人肉を食べるのと同じぐらいに嫌悪感を引き起こす行為である。この点について、Leach(1966)は次のように説明をする。英語には“Man and dog are 'companions'”で

あるとか“The dog is ‘the friend of man’”のように、人間とイヌを同一の種類（カテゴリ）に属している生き物であると見なすような口語表現が多い。他方、人間と食物は対立的なカテゴリであって、人間は食物ではない。したがって、イヌも食物になりえないというわけである。つまり言語のカテゴリが食習慣を規定することがあり、イギリスでは、言語表現上イヌは人間と同じカテゴリに属し、人間に非常に近い存在、すなわち人間の「仲間」であり「友」であるから、それを食べるなどということは、人間を食べるのと等しい行為となってしまうのである。

このような西洋（特にイギリス）文化と日本文化のイヌに対する「仲間意識」の強さの違いから、それぞれの文化において異なるイヌに関する概念形成がおこなわれ、その概念内容の違いが英語と日本語のメタファー表現の意味に敏感に反映していると考えられる。

4. 結 論

本稿では、まず英語と日本語のイヌのメタファー表現の意味を考察した。その共通点は「劣ったもの、役に立たないもの」というようなネガティブな意味合いを含んでいるということであり、最も大きな相違点は、英語の表現には「愛すべき仲間」とでも呼べるような意味合いが含まれているのに対して、日本語の表現にはそれがないということであった。そして、そのようなメタファー表現における共通点と相違点は、西洋文化と日本文化における人間とイヌの関わり方（一つ屋根の下で手間をかけた飼育と半野良犬状態）を通して形成された、それぞれの文化特有のイヌの概念を反映したものであると論じた。

注

- (1) 「ソース領域」と「ターゲット領域」は、瀬戸(1987)の用語で言えば、「喩えるもの」と「喩えられるもの」ということになる。本節の例では、「建築物」が「ソース領域」、「議論」が「ターゲット領域」に相当する。
- (2) 聖書の中のイヌのイメージについては、ミルワード(1992)を参考にした。本稿の句の引用は、『新改訳聖書』（日本聖書刊行会、1970年発行）からのものである。
- (3) Lakoff and Johnson(1980)の第11章 ‘The partial nature of metaphorical structuring’を参照。
- (4) 文化における「両義性」の問題は、山口(1975)に詳しい議論がある。
- (5) 日本文化と西洋文化を、農耕と牧畜という二つの文化圏の対置として捉える根拠については石田(1967)を参照。
- (6) 日本と西洋におけるイヌの躰と自律性の問題に関しては、鈴木(1973)にも興味深い考察がある。

参考文献

- クレベール, ジャン＝ポール 1989. 『動物シンボル事典』竹内信夫他訳 大修館書店
ドロール, ロベール 1998. 『動物の歴史』桃木暁子訳 みすず書房
Empson, William. 1989. *The structure of complex words* (reprint ed.). Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
フロイス, ルイス 1991. 『ヨーロッパ文化と日本文化』岡田章雄訳 岩波書店
池上俊一 1997. 「西洋世界の動物観」国立歴史民俗博物館編『動物と人間の文化誌』吉川弘文館
石田英一郎 1967. 『東西抄』筑摩書房

- 加茂儀一 1973. 『家畜文化史』法政大学出版局
- Kövecses, Zoltán. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. New York: Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1993. The contemporary theory of metaphor. In Andrew Ortony (ed.), *Metaphor and thought* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. 渡部昇一他訳 1986. 『レトリックと人生』大修館書店
- Leach, Edmund. 1966. Anthropological aspects of language: Animal categories and verbal abuse. In Eric H. Lenneberg (ed.), *New directions in the study of language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- ローレンツ, コンラート 1966. 『人イヌと出会う』小原秀雄訳 至誠堂
- ミルワード, ピーター 1992. 『聖書の動物事典』中山理訳 大修館書店
- 沼田陽一 1990. 『イヌはなぜ人間になつたのか—ドッグおもしろ博物学—』PHP研究所
- 大石俊一 1987. 『犬とイギリス人—一つの国民性論—』開文社出版
- 瀬戸賢一 1997. 『認識のレトリック』海鳴社
- 鈴木孝夫 1973. 『ことばと文化』岩波書店
- 谷口研語 2000. 『犬の歴史—人間とともに歩んだ一万年の物語—』PHP研究所
- 塚本学 1997. 「江戸時代人のイヌとのつきあい」国立歴史民俗博物館編『動物と人間の文化誌』吉川弘文館
- 山田孝子 1994. 『アイヌの世界観—「ことば」から読む自然と宇宙—』講談社
- 1996. 「言語が映し出す超自然観」宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社
- 山口昌男 1975. 『文化と両義性』岩波書店
- 柳田國男 1968. 「豆の葉と太陽」『定本柳田國男集第二巻』筑摩書房

辞書類 (本文中で特に言及せずに、参考にしたものも含む)

- Collins COBUILD English Guides 7: Metaphor*. 1995. HarperCollins Publishers.
- Longman Dictionary of Contemporary English* (3rd ed.). 1995. Longman.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (5th ed.). 1995. Oxford University Press.
- Oxford English Dictionary* (2nd ed.) on CD-ROM Version 3. 0. 2002. Oxford University Press.
- 『アクティブジーニアス英和辞典』1999. 大修館書店
- 『ジーニアス英和大辞典』2001. 大修館書店
- 『ジーニアス英和辞典第三版』2001. 大修館書店
- 『広辞苑第五版』1998. 岩波書店
- 『日本国語大辞典第二版』2000. 小学館
- 『リーダーズ英和辞典第二版』1999. 研究社
- 『新英和大辞典第五版』1980. 研究社
- 『新明解国語辞典第五版』1997. 三省堂
- 『小学館ランダムハウス英和大辞典第二版』1994. 小学館